〔古今和歌集春一〕ふるとしに、春たちける日よめる、　在原元方

年の内に春はきにけり一とせをこぞとやいはんことしとやいはん

〔公事根源正月〕供若水　立春日

〔知信朝臣記〕天承元年十二月廿三日、立春正月節也、主水女官獻立春水、居折敷高坏、女官率采女、畫御座間簀子敷小筵一枚爲下敷供之、廳給祿云々、匹絹

〔故實拾要五〕立春御獻　是三獻ハ自男居供之、御强供御ノ御膳、御菓物ノ御膳ハ、大隅大炊頭供之、如元日、

〔禁中年中行事〕立春　强供御御膳　元日同　小預調進　ツルベ餅　小預調進

〔二水記〕文龜四年〇永正元年正月十二日乙亥、今日爲立春、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年正月八日、りしゆんの御さか月三ごん參る、こわぐ御も參る、御はがためも參る、御さか月よりさき也、女御の御かた、女中をとこたち、御とをりあり、

〔日本歳時記三月〕春分は、日夜の長さひとしき時なり、寒暖も亦ひとし、去かれども夜あけて日の出るまで二分半を曉とし、日入て暮まで二分半を昏とす、昏曉合て半時は夜に屬すといへども、その明らかなること晝におなじければ、日夜ひとしき時といへども、猶夜より日は長し、冬至に一陽來復して、漸陽氣生じ、日もながくなりて、春分にいたり日夜ひとしくなる、〇中略

春分は陽氣のやうやく發くる時にして、寒温のさかひなり、故に春分の節に入し後、はやく諸菜蔬の種を下すべし、萬のたねをうゆるに、春分を期とする事を惡しくいひならはして、彼岸に物だねをまくといふ、愚民はせむるにたらず、士君子たる人のいへるはいとくちをし、春分は陰陽日夜のひとしき時にして、一年の大節なる事をさらざるにや、又凡花草の苗をわかち種べし、およそ此時たねをまき、根をわかちうゆべきものは、甜瓜、菜瓜、茄、壺蘆、冬瓜、絲瓜、胡瓜、芋、牛蒡、稷、煙草、